

【 復活のトロパリ 第3調 】

てんにあるものたのしめよ、ちにあるもの
 天在者樂 地在者

よろこべよ、しゅはそのひぢのちからをあら
 悦 主 其 臂 力 顯

わして、しをもつてしをほろぼし、ふ復
 死 以 死 滅 ぼ し 復

くかつのはじめとなあり、われらをぢごく
 活 首 我 等 地 獄

のはらよりすくうい、せかいにおおいな
 腹 救 世 界 大

るあわれみをたまいたればなり。
 憐 賜

【 迎接祭のトロパリ 第1調 】

おんちようをみちこおむるしょうしんどうていぢよ
 恩寵 満 被 生 神童 貞女

よ、よろこべ、なんぢよりぎのひりすとすわれ
 慶 爾 義 日 我

らのかみ、くらやあみにあるものを
 等 神 幽 暗 在 者 を

てらすしゅはかがやきいでたればなり。
 照 主 輝 出

ぎなるおきなよ、なんぢもたのしめ、
 義 翁 爾 樂

なんぢわがたましいのきゆうしゅ、われらにふく
 爾我霊救主我等復
 かつをたもうものをいだきたればなり。

【 審判の主日のコンダク 第1調 】

こうえいはちちとこいとせいしんにきす、
 光榮父子とせいしんにきす、
 かあみよ、なんぢがこうえいをもって
 神あみよ、爾光榮以
 ちにきたりて、ばんゆうがおののき、ひの
 地來りて、萬有が戦の火
 かわがしんばんざのまえにひき、きろくがひらか
 河審判座前引記録が披
 れ、ひそかなることあらわれんとき、い至
 隠事顯時
 たありてぎなるしんばんあんしゃよ、われをきえ
 義審判者我滅
 ざるひよりのがれしめて、われになんぢの
 火脱我爾
 みぎにたつをえしめたまえ。

【 迎接祭のコンダク 第1調 】

いまも い つ も よよ に い、ア
今 何 時 も 世 世

ミ ン。

ハリスト スか み よ、 なんぢは おのれの こう た
神 爾 己 降 誕

んに て どう て いぢよの はら を せ い に し、 よ
童 貞 女 腹 聖 宜

ろ し き に か な い て シメ オンの て に ふ く を く
合 手 福 降

だ し、 いま われらの た め に す く い を そ な
今 我 等 爲 救 備

え た ま え り ひ と お り ひ と を い つ く し む
給 獨 人 愛

し ゆ よ わ が く に を つ ね に へ い わ に し、
主 我 國 恒 平 和

なんぢの あ い す る き ょう か い を か た め た ま え。
爾 愛 教 会 固 給

司祭) (黙誦： 聖なる神、 聖者の中に息い、 セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、

ヘルヴィムより讃榮せられ、 悉くの天軍より伏拝せられ、 萬物を無より有と

なし、 人を爾の像と肖とに依りて造り、 爾が諸の賜を以て之を飾り、

願う者に智慧と明悟とを與え、 罪を行う者を棄てずして、 其救の爲に痛悔

を立て、 我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、 此の時に於ても、 爾が聖な

さいだん こうえい まえ た なんぢ どうぜん ふくはいさんえい たてまつ た もの
る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と

しゅさい なんぢみづか われらざいにん くち せいさん うた う なんぢ じんじ
なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を

もつ われら のぞ われら およ じゆう じゆう つみ ゆる わ たましい からだ
以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と

せい われら しょうがいぜんこう もつ なんぢ つと え せしめ たま せい
を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる

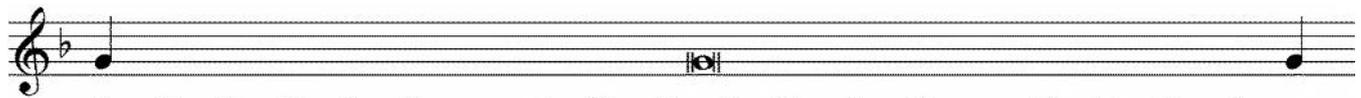
しょうしんぢよ こせい なんぢ よろこび な しょせいじん きとう よ
生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) けだしわ かみ なんぢ せい われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま いつ よよ
蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世

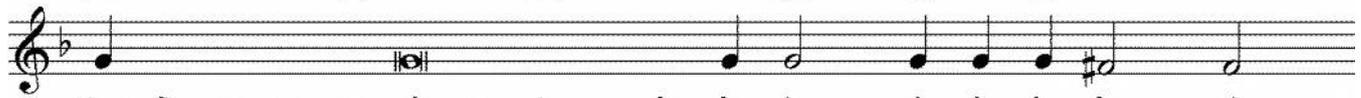
に、



【 聖三祝文 】



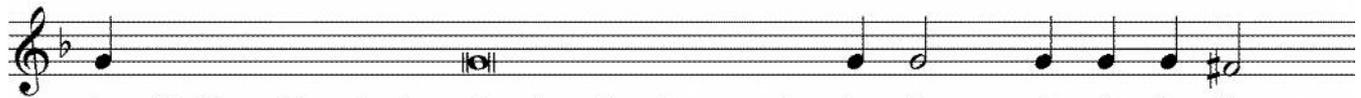
せいなるかみ、せいなるゆうき、せいなる
聖 神 聖 勇 毅 聖



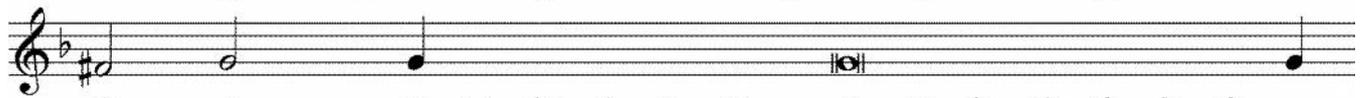
じょうせいのものよ、われらをあわれめ
常 生 者 我 等 憐 憐



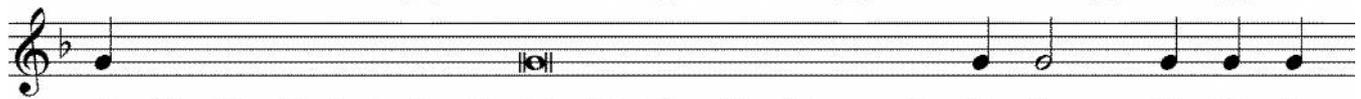
よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
聖 神 聖 勇 毅 聖



なるじょうせいのものよ、われらをあわれ
常 生 者 我 等 憐 憐



めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
聖 神 聖 勇 毅



せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
聖 常 生 者 我 等 憐 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
光 榮 父 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。
歸 今 何 時 世 世

せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
聖 常 生 者 我 等 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
聖 神 聖 勇

き 、 せ い な る じ ょ う せ い の も の よ 、 わ れ ら を
毅 聖 常 生 者 我 等

あ わ れ め よ 。
憐

司祭) (黙誦：主しゅの名なに依よりて來きたる者ものは崇あがめ讃ほめらる、ヘルヴィムざに座ものする者なんぢよ、爾そのは其くに國

の光こう榮えいの寶ほう座ざに在ありて恒つねに崇あがめ讃ほめらる、今いまも何いつ時よも世よ世よに、)

【 プロキメン 提綱 審判の主日の 第3調 及び 迎接祭の 第3調 】

司祭) 慎つつしみきて聽きくべし、衆しゅう人じんに平へい安あん、

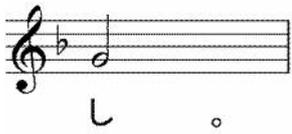
誦經) 爾なんぢの神しんにも、

司祭) 睿えい智ち、

誦經) プロキメン、吾わが主しゅは 大おおなり、其その力ちからも亦また 大おおなり、其その智ち慧えは 測はかり難がたし、

わ が しゅ は お お い な り 、 そ の ち か ら も ま た お お
吾 主 大 其 力 亦 大

い な り 、 そ の ち え は は か り が た あ
其 智 慧 測 難



誦經) 主しゅを讃ほめ揚あげよ、蓋けだし我われ等らの神かみに歌うたうは善ぜんなり、是これ樂たのしき事ことなり、

わがしゅはおおいなり、そのちからもまたおお
吾主大 其力亦大
いなり、そのちえははかりがたあ
其 智慧 測 難
し。

誦經) 我わが靈たましいは主しゅを崇あがめ、我わが神しんは神かみ我わが救きゆう主しゅを悦よろこべり。

わがたましいはしゅをあがめ、わが
我 靈 主 崇 我
しんはわがかみきゆうしゅをよろこべ
神 我 神 救 主 悦
り。

【 アポストロス 使徒經 140 端 コリント前書 8 章 8 節～9 章 2 節 】

司祭) 睿智、

誦經) 聖使徒せいしとパウエルがコリント人じんに達する前書ぜんしょの讀よみ、

司祭) 謹つつしみて聽きくべし、

誦經) 兄弟よ、食物しょくもつは我等われを神かみの前に立たしめず、蓋けだし我等われは食くらうとも、得うる所ところなく、食

わずとも、失うしなう所ところなし。然しかれども慎つつしめ、恐おそらくは此この爾等なんぢらの自由じゆうは弱よわき者の躓つまづき

とならん。蓋けだし若ひとし人、爾なんぢ知識ちしきある者が、偶像ものの廟ぐうぞうに坐みやして食くらうを見みば、彼かれ弱よわき者の

りょうしん かれ ぐうぞう ささ もの くら すす しか なんぢ ちしき よ
 良心は、彼にも偶像に獻げし物を食うを勧めざらんや。然らば爾の知識に因りて、
 よわ けいてい これ ため し ところ もの ほろ なんぢら か ごと けいてい たい
 弱き兄弟ハリストスの之が爲に死せし所の者は亡びん。爾等此くの如く兄弟に對
 つみ え かれら よわ りょうしん きず たい つみ う ゆえ も
 して罪を獲、彼等の弱き良心を傷つけて、ハリストスに對して罪を獲るなり。故に若し
 しょくもつわ けいてい いざな われなが にく くら わ けいてい いざな ため
 食物我が兄弟を誘わば、我長く肉を食わざらん、我が兄弟を誘わざらん爲なり。
 われしと あら われじしゆ あら われ われら しゆ み あら
 我使徒たるに非ずや。我自主たるに非ずや。我イイススハリストス我等の主を見しに非ず
 なんぢら しゆ おい われ わざ あら たと われたにん ため しと なんぢら
 や。爾等は主に於て我の工たるに非ずや。設い我他人の爲に使徒たらずとも、爾等の
 ため これ けだしなんぢら しゆ おい われ しとしょく いん
 爲には是なり、蓋爾等は主に於て我の使徒職の印なり。

 (比較用 口語訳) 兄弟たちよ、食物は、わたしたちを神に導くものではない。食べなくても損はないし、食べても益にはならない。しかし、あなたがたのこの自由が、弱い者たちのつまずきにならないように、気をつけなさい。なぜなら、ある人が、知識のあるあなたが偶像の宮で食事をしているのを見た場合、その人の良心が弱いため、それに「教育されて」、偶像への供え物を食べるようにならないだろうか。するとその弱い人は、あなたの知識によって滅びることになる。この弱い兄弟のためにも、キリストは死なれたのである。このようにあなたがたが、兄弟たちに対して罪を犯し、その弱い良心を痛めるのは、キリストに対して罪を犯すことなのである。だから、もし食物がわたしの兄弟をつまずかせるなら、兄弟をつまずかせないために、わたしは永久に、断じて肉を食べることはしない。わたしは自由な者ではないか。使徒ではないか。わたしたちの主イエスを見たではないか。あなたがたは、主にあるわたしの働きの実ではないか。わたしは、ほかの人に対しては使徒でないとしても、あなたがたには使徒である。あなたがたが主にあることは、わたしの使徒職の印なのである。

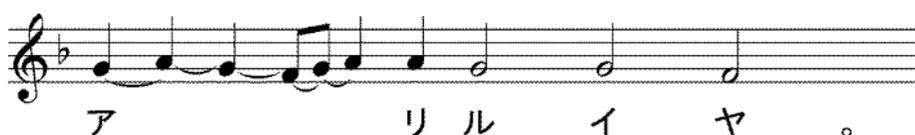
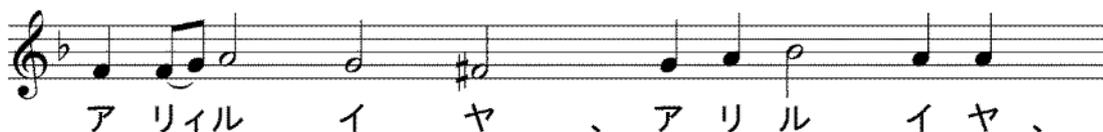
【 アリルイヤ 審判の主日の 第8調 及び 迎接祭の 第8調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{きた しゆ うた かみわ すくい かため よ} アリルイヤ、來りて主に歌い、神我が救の防固に呼ばん、



誦經) ^{さんよう もつ そのかんばせ まえ すす うた もつ かれ よ} 讚揚を以て其顔の前に進み、歌を以て彼に呼ばん、

ア リイル イ ヤ 、 ア リル イ ヤ 、
ア リル イ ヤ 。

誦經) ^{しゅさい いまなんぢ ことば したが なんぢ ぼく ゆる あんぜん ゆ} 主宰よ、今爾の言に循いて、爾の僕を釋し、安然として逝かしむ、

ア リイル イ ヤ 、 ア リル イ ヤ 、
ア リル イ ヤ 。。

司祭) (黙誦: ^{ひと あい しゅさい わ こころ かみ し ちえ いさぎよ ひかり かがや わ しねん} 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の 淨き光を輝かし、我が思念

^{め ひら なんぢ ふくいん おしえ さと たま わ うち なんぢ ふく いましめ} の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる 誠を

^{おそ おそれ い われら ことごと にくたい よく ふ およ なんぢ よるこ ところ} 畏るる 畏をも入れて、我等が 悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所

^{おも か おこな ぞくしん せいかつ す いた たま けだし かみ} を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、

^{なんぢ わ たましい からだ こうしょう われらなんぢ なんぢ むげん ちち しせいしぜん} 爾は我が 靈と體との光 照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし

^{いのち ほどこ なんぢ しん こうえい けん いま いつ よよ} て生命を 施す 爾の神とに光 榮を獻ず、今も何時も世世に、アミン。)

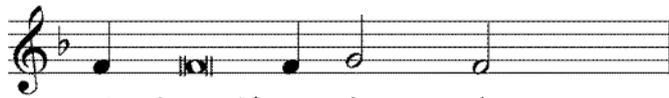
【 エヴァンゲリオン 福音經 マトフェイ福音書106端 25章31~46節 】

司祭) ^{えいち つつし た せいふくいんけい き しゅうじん へいあん} 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、

なんぢの し んにも 。
爾 神

司祭) ^{でん せいふくいんけい よみ} マトフェイ傳の聖福音經の讀、

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 し、 光 榮



は なんぢに き す 。
爾 歸

司祭) 謹 ^{つつし}みて聴くべし、主 ^き曰えり、人 ^{しゅい}の子は、其 ^{ひと}光 ^こ榮 ^{そのこうえい}を以て、諸 ^{もつ}の聖 ^{もろもろ}なる天使 ^{せい}と偕 ^{てんし}に來 ^{とも}きた

らん時 ^{とき}、其 ^{そのこうえい}光 ^{ほうざ}榮 ^ざの寶座 ^{ばんみんかれ}に坐 ^{まえ}し、萬 ^{あつま}民 ^{しこう}彼 ^{かれ}の ^{ぼくしゃ}前 ^{ひつじ}に集 ^{やぎ}り、而 ^{そのひだり}して ^お彼は、牧 ^{そのときおう}者 ^{みぎ}の綿羊 ^{やぎ}を山 ^{やぎ}羊 ^{やぎ}

より別 ^{わか}つが如 ^{ごと}く、彼 ^{かれら}等 ^{あいわか}を相 ^{ひつじ}別 ^{そのみぎ}ちて、綿 ^{やぎ}羊 ^{そのひだり}を其 ^お右 ^{そのときおう}に、山 ^{みぎ}羊 ^{やぎ}を其 ^{やぎ}左 ^{やぎ}に置 ^{やぎ}かん。其 ^{やぎ}時 ^{やぎ}王 ^{やぎ}は右 ^{やぎ}

に在 ^ある者 ^{もの}に謂 ^いわん、我 ^わが父 ^{ちち}に祝 ^{しゅく}福 ^{ふく}せられし者 ^{もの}よ、來 ^{きた}りて、創 ^{そう}世 ^{せい}以 ^い來 ^{らい}爾 ^{なんぢら}等 ^らの爲 ^{ため}に備 ^{そな}え

られたる國 ^{くに}を嗣 ^つげ。蓋 ^{けだしわ}我 ^うが飢 ^{とき}えし時 ^{なんぢら}、爾 ^く等 ^わ我 ^{かわ}に食 ^{とき}わせ、我 ^{われ}が渴 ^のきし時 ^わ、我 ^{とき}に飲 ^{われ}ませ、我 ^わ

が旅 ^{たび}せし時 ^{とき}、我 ^{われ}を宿 ^{やど}らせ、我 ^わが裸 ^{はだか}なりし時 ^{とき}、我 ^{われ}に衣 ^きせ、我 ^わが病 ^やみし時 ^{とき}、我 ^{われ}を顧 ^{かえり}み、我 ^わ

が獄 ^{ひとや}に在 ^ありし時 ^{とき}、我 ^{われ}に來 ^{きた}れり。時 ^{とき}に義 ^ぎ人 ^{じん}等 ^{かれ}彼 ^{こた}に答 ^いえて曰 ^{しゅ}わん、主 ^{われら}よ、我 ^{いつなんぢ}等 ^う何時 ^う爾 ^うの飢 ^う

うるを見て、食 ^みわせ、或 ^{あるい}は渴 ^{かわ}くを見て、飲 ^みませしか。何 ^の時 ^{いつなんぢ}爾 ^{たび}の旅 ^みするを見て、宿 ^{やど}らせ、或 ^{あるい}

は裸 ^{はだか}なるを見て、衣 ^みせしか。何 ^き時 ^{いつなんぢ}爾 ^やの病 ^{あるい}み、或 ^{ひとや}は獄 ^あに在 ^みるを見て、爾 ^{なんぢ}に來 ^{きた}りしか。王 ^{おう}

かれら ^{こた}に答 ^いえて曰 ^{われ}わん、我 ^{なんぢら}誠 ^つに爾 ^{なんぢら}等 ^{これ}に語 ^わぐ、爾 ^こ等 ^いが之 ^{ちい}を我 ^{けいてい}が此 ^{ひとり}の至 ^{ひとり}と小 ^{ひとり}き兄 ^{ひとり}弟 ^{ひとり}の一人 ^{ひとり}

に 行 ^{おこな}いしは、即 ^{すなわち}我 ^{われ}に 行 ^{おこな}いしなり。其 ^{その}時 ^{とき}又 ^{また}左 ^{ひだり}に在 ^ある者 ^{もの}に謂 ^いわん、詛 ^{のろ}われし者 ^{もの}よ、我 ^{われ}

を離 ^{はな}れて、惡 ^{あく}魔 ^ま及 ^{およ}び其 ^{その}使 ^{つか}等 ^らの爲 ^{ため}に備 ^{そな}えられたる永 ^{えい}遠 ^{えん}の火 ^ひに往 ^ゆけ。蓋 ^{けだしわ}我 ^うが飢 ^{とき}えし時 ^{とき}、

爾 ^{なんぢら}等 ^{われ}我 ^くに食 ^わわせず、我 ^{かわ}が渴 ^{とき}きし時 ^{われ}、我 ^わに飲 ^{たび}ませず、我 ^{とき}が旅 ^{われ}せし時 ^{やど}、我 ^わを宿 ^{はだか}らせず、我 ^{はだか}が裸 ^{はだか}

なりし時 ^{とき}、我 ^{われ}に衣 ^きせず、我 ^わが病 ^{また}み、又 ^{ひとや}は獄 ^あに在 ^{とき}りし時 ^{われ}、我 ^{かえり}を顧 ^{とき}みざりき。時 ^{かれら}に彼 ^{こた}等 ^{こた}も答 ^{こた}

えて曰 ^いわん、主 ^{しゅ}よ、我 ^{われら}等 ^{いつなんぢ}何時 ^う爾 ^{あるい}の飢 ^{かわ}え、或 ^{あるい}は渴 ^{あるい}き、或 ^{あるい}は旅 ^{あるい}し、或 ^{あるい}は裸 ^{あるい}なる、或 ^{あるい}

は病 ^やみ、或 ^{あるい}は獄 ^{ひとや}に在 ^あるを見て、爾 ^みに事 ^{なんぢ}えざりしか。其 ^{つか}時 ^{その}彼 ^{とき}等 ^{かれら}に答 ^{こた}えて曰 ^いわん、我 ^{われ}誠 ^{まこと}

に 爾 ^{なんぢら}等 ^つに語 ^{なんぢら}ぐ、爾 ^{これ}等 ^こが之 ^こを此 ^いの至 ^{ちい}と小 ^{もの}き者 ^{ひとり}の一人 ^{ひとり}に 行 ^{おこな}わざりしは、即 ^{すなわち}我 ^{われ}に 行 ^{おこな}

ざりしなりと。此 ^{これら}等 ^{もの}の者 ^{えい}は永 ^{えい}遠 ^{えん}の苦 ^{くる}に往 ^{しゅ}き、義 ^ぎ人 ^{じん}等 ^らは永 ^{えい}遠 ^{えん}の生 ^{いの}命 ^ちに往 ^ゆかん。

(比較用 口語訳) 主は言われた、人の子が栄光の中にすべての御使たちを従えて来るとき、彼はその栄光の座につくであろう。そして、すべての国民をその前に集めて、羊飼が羊とやぎとを分けるように、彼らをより分け、羊を右に、やぎを左におくであろう。そのとき、王は右にいる人々に言うであろう、『わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい。あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせ、かわいていたときに飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、裸であったときに着せ、病気の

ときに見舞い、獄にいたときに尋ねてくれたからである』。そのとき、正しい者たちは答えて言うであろう、『主よ、いつ、わたしたちは、あなたが空腹であるのを見て食物をめぐみ、かわいているのを見て飲ませましたか。いつあなたが旅人であるのを見て宿を貸し、裸なのを見て着せましたか。また、いつあなたが病気をし、獄にいるのを見て、あなたの所に参りましたか』。すると、王は答えて言うであろう、『あなたがたによく言うておく。わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである』。それから、左にいる人々にも言うであろう、『のろわれた者どもよ、わたしを離れて、悪魔とその使たちとのために用意されている永遠の火にはいってしまえ。あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせず、かわいていたときに飲ませず、旅人であったときに宿を貸さず、裸であったときに着せず、また病気のときや、獄にいたときに、わたしを尋ねてくれなかったからである』。そのとき、彼らもまた答えて言うであろう、『主よ、いつ、あなたが空腹であり、かわいておられ、旅人であり、裸であり、病気であり、獄におられたのを見て、わたしたちはお世話をしませんでしたか』。そのとき、彼は答えて言うであろう、『あなたがたによく言うておく。これらの最も小さい者のひとりにしなかったのは、すなわち、わたしにしなかったのである』。そして彼らは永遠の刑罰を受け、正しい者は永遠の生命に入るであろう』。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。
爾 歸

※聖体礼儀③（金口イオアン聖体礼儀）へ